

THE 7th INTERNATIONAL STUDENT SEMINAR

第7回 国際学生セミナー

JAPAN AND THE WORLD: THE CULTURAL INTERFACE

—Giving a Thought to the Era of Interdependence—

文化接触と日本 —“相互依存”のなかで—

主催

財団法人 大学セミナー・ハウス  
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.

財団法人 日本国際教育協会  
ASSOCIATION OF INTERNATIONAL EDUCATION, JAPAN

◆ 主 題

1980年代はいかなる時代であろうか。今日の流動的な国際環境のなかで、明確な予測を試みることはきわめて困難であろうが、国家間の接触や拡大が深まれば深まるほど、そこに様々な摩擦や問題が生じるであろうことは、今日の厳しい国際社会における宿命だといえるかもしれない。いわゆる異文化間接触の重要性と難かしさも、こうした現実を背景にしている。

70年代の世界においては、当初の緊張緩和という雰囲気にもかかわらず、米中ソなどの大国のパワー・ゲームが熾烈に展開され、一方では地域紛争が各地に頻発した。同時に70年代は、いわゆる石油危機によって、資源・エネルギー、食糧、人口の諸問題などがこのまま放置されると、やがて人類の生存そのものが脅かされるであろうという深刻な事態を人びとに気づかせた。

こうしたなかで、80年代がいかなる時代であるにせよ、国家間、民族間さらには諸国民間の相互依存体系がますます重要な意味をもち、人類はいや応なく“宇宙船地球号”のなかで共生してゆかねばならなくなるであろうことは間違いない。今回の国際学生セミナーが、こうした認識に立脚し、“相互依存の時代を考える”立場から「文化接触と日本」という主題に迫ろうとする理由も、ここにある。

当大学セミナー・ハウスでは、昨年(昭和54年)の第6回国際学生セミナーにおいて「閉ざされた社会から開かれた社会へ」というテーマを中心に「文化接触と日本」を考え、多くの留学生の参加を得て、大きな成果をあげることができた。さらに、当セミナー・ハウスは昭和47年以来、6回の国際学生セミナーを開催し、いずれも、共通の関心のもとに充実した討議を積み重ねることができた。今回は、そうした成果をふまえて、とくに日本と非西欧世界との接触における問題点を考えるために、各地域研究の第一線で活躍されている先生方をお招きして 指導いただき、全体的に地域研究的なアプローチによって問題を深めたいと考えている。在日留学生、チューター等日本人学生、社会人の方々が数多く参加され、早春の多摩丘陵を舞台に国際交流の輪がもう一つ拓がりゆくことを期待している。

■期 日 昭和55年3月17日～19日(月～水の2泊3日)

■場 所 大学セミナー・ハウス(八王子市下柚木・電話0426-76-8511)

■参加対象 国公立大学に在学する留学生とチューター等日本人学生、社会人若干名

◆ 全体講義

日本人の日本知らず —世界の中の日本—

Japan in Today's World

上智大学教授 ピーター・ミルワード

Peter MILWARD, Sophia University

## ◆ セクション演習

### A 東アジアと日本の近代化 — その軌跡と接点 —

Japanese Modernization in the Perspective of the History of East Asia

東京大学助教授 平野 健一郎

HIRANO Kenichiro, Tokyo University

日本と中国は同じ東アジアの国として、同じ時代に近代西洋の衝撃を受けた。そして、両国はその衝撃に耐えるために、共に近代化の試みを開始した。しかし、両国の近代化の歩みは、しばしば指摘されるように、同じ方向を辿ったわけではない。両者は、時に接触し、時に離反し、時に衝突して、複雑な軌跡を描いた。両国の近代化の歴史を文化接触、文化摩擦の観点から再検討することは、東アジアの今後の歩みを考える上にも大きな意味をもつであろう。

▶テキスト 東京大学公開講座20「アジアのなかの日本」(特に第3,4,8,9,10章) 東京大学出版会 1,200円

### B 東南アジアの価値体系と日本的価値観 — 伝統的日本文化の再評価 —

Value System of South East Asia and Japanese Culture

早稲田大学教授 菊地 靖

KIKUCHI Yasushi, Waseda University

東南アジア(非西歐社会)の社会価値体系と日本のそれとはそれほど大きな格差は認められない。つまり、日本の社会でその価値体系を十分理解して、善良な市民生活を送れる人間であれば、異なった文化社会への対応は誰にでもできるのである。何もむつかしく、国際性とは、などと目クジラを立てて論じるまでもない。むしろ日本文化を論じ、理解し、評価する方が国際性を学ぶよりも、異文化対応への近道でさえあるということである。

### C アラブと日本人の距離 — アラブとの文化接触をめぐる —

Understanding Other Cultures — Arabs and Japanese —

津田塾大学教授 片倉 もとこ

KATAKURA Motoko, Tsuda College

アラブと日本は、近年、急速に経済的接触を持つにいたっているが、心理的、文化的には、あいかわらず遠い存在である。その間の距離は、どうして出来たのか、その理由をまず歴史的に考察する。さらに、現代アラブの持つ世界観、価値観などを分析してみようと思う。フィールド・ワークで得たなまの具体的なデータを提供し、できるだけ、立体的かつ具象的に勉強していきたい。

▶テキスト 片倉もとこ著「アラビア・ノート — アラブの原像を求めて —」日本放送出版協会 600円

### D ラテン・アメリカと日本 — 相互依存と相互理解 —

Latin America and Japan — Interdependence and Mutual Understanding —

筑波大学助教授 中川 文雄

NAKAGAWA Fumio, Tsukuba University

ラテン・アメリカ諸国と日本にとって、従来、それぞれの対外関心の枠の中で相互の存在は周知的なものでしかなかった。しかし、そこには全般的な無関心と並行して、相互を神秘化し、あるいは拡大した虚像を抱く傾向も存在した。その意味で、1970年代前半のメキシコが見せた異常なまでの対日期待感も、あるいは、第二次大戦前後の一時期に一部のラテン・アメリカ諸国で起きた排日運動も、客観的条件が変わった今日も、両者の関係の本質的な問題を提示しているように思われる。本セクションでは、まず、両者の関係の回顧と展望を行ない、次いで相互の認識の現状を探り、最後に両者の間に生じうる対立と摩擦について、それを生む政治経済的条件と相互の価値観の相違にふれながら考えることにしたい。

▶テキスト 石田 雄著「メヒコと日本人」(UP選書) 東京大学出版会 900円

R. P. Dore, "Japan and Latin America Compared" (当日配布する)

### E 日豪関係の新時代 — 経済関係から総合的關係へ —

Towards a New Era for Australia and Japan — From Economic to Total Relationships —

成蹊大学教授 広野 良吉

HIRONO Ryokichi, Seikei University

20世紀初頭以来、太平洋戦争期を除いて、日豪関係は日本の工業製品の対豪輸出に対して、豪州の一次産品対日輸出の増大という経済関係によって支配されてきた。特に1960年代から70年代にかけては、日本の高度経済成長に対応する形で、豪州の鉱物資源の対日輸出と日本企業の対豪鉱物資源開発投資との双方に飛躍的増大がみられた。1980年代になって、日本の対豪エネルギーおよび食糧資源への依存度が高まるにつれて、この一次産品中心の経済関係は一層強化されることが予測されるが、果して日豪関係はそれだけで済まされるであろうか。日豪を取り巻く米・中・ソおよびASEAN、インドシナ半島諸国の対外戦略をにらんだ環太平洋構想の中で、今後の日豪関係はどう展開していくのであろうか。

▶テキスト 日豪調査委員会編(1976年刊行)「日豪と西太平洋経済」(当日配布する)

## ◆ 運営委員

委員長	東京外国語大学教授	中 嶋 嶺 雄
	上智大学教授	三 輪 公 忠
	津田塾大学助教授	小 倉 充 夫
	東京大学教授	岡 野 行 秀
	早稲田大学外事課長	山 代 昌 希



# JAPAN AND THE WORLD: THE CULTURAL INTERFACE

— Giving a Thought to the Era of Interdependence —

Posing for a moment at the dawn of a new decade we are tempted to ask ourselves, "What will be in store for us in the 1980's?" "Uncertainty?" might be the answer. With the highly fluid nature of the international environment it is almost impossible to make valid projections about tomorrow.

Yet, I believe we could make one possible speculation: close contact and increased interaction among nation-states should invariably introduce problems and friction at the same time. We have to admit that this is what the world dictates and we might as well face it.

Therefore, the so-called "intercultural exchange" faces many difficulties, although embracing crucial importance, in that it is intricately related to this stern reality of international relations.

Looking at the 1970's in retrospect, it seems that two major currents command our attention. First, despite the general environment of detente in the early years, reality saw the gradual encroachment of fierce power play among the super-powers, China, the Soviet Union and the United States. In some areas, perceived tensions were often translated into actual conflicts and skirmishes (although they were predominantly of local magnitude).

The other discernible current has been a heightened awareness of the seriousness of global problems: food, population, energy and natural resources (notably the "oil crunch"), the complication of which calls for concerted action by all nations, and which threatens the very survival of the human race itself.

Whatever the implications of preceding development in the 1970's, this decade will necessarily add a new, significant dimension to the system of interdependence among peoples, nations and states. In other words, we will have to seek, by all means, ways to coexist as a human race on this planet called "Spaceship Earth".

The theme given by the International Student Seminar, "Japan in Cultural Interface" becomes all the more cogent when we seriously consider this reality. I deem it particularly appropriate and fitting to have an opportunity to see Japan in the context of ever-accelerating global interdependence.

I know that we benefited much from last year's International Student Seminar, entitled "Japan and the World: The Cultural Interface—From a Closed Society to an Open Society"—thanks to active contributions from foreign students as well as many Japanese participants.

Furthermore, it is encouraging to see the successful record that this seminar has achieved over the past six years in terms of the results and the impact it has had on the participants.

Therefore it gives us a rare privilege this year to welcome many of the leading area specialists, whose perceptive advice should help us explore and elucidate problems relating to Japan and the non-Western nations. I am confident that together we will be able to obtain better insight and an enlightened view of the problems, with due application of the area studies approach.

We certainly expect active participation by many of our students as well as the foreign students, regardless of nationality, and hope that a configuration of friendship and camaraderie will grow in early spring when we'll all meet in the country hill of Tama.

## ◆ 募集要項

### 1. 募集人員

100名

日本人： 学生 60名 社会人 10名

外国人： 留学生 25名 社会人 5名

### 2. 参加資格

チューター等日本人学生、留学生等。セミナーでは原則として日本語を使用するが、質疑応答や討論の場では必要に応じて英語を使用することができる。従って、留学生の場合は日本語を理解できること、日本人学生も英語を聞く力のあることが望ましい。

### 3. 参加経費

7,800円（セミナーの費用の一部に充当する。その他の経費は主催者の負担とする。）なお、留学生については、事情により申し出があれば、一定額のスカラーシップの用意がある。

### 4. 申込方法

所定の申込書に、登録料として参加経費の前納分 3,000円を添え、締切日まで必着するように、大学セミナー・ハウス企画室宛に現金書留で郵送のこと。（留学生の場合は大学の留学生担当課を通じて申込むこともできる。）参加決定の選にもれた場合にのみ、前納の登録料を返却する。

### 5. 申込締切

昭和55年2月27日（水）。急ぎの場合は、申込書送付先に電話連絡のこと。

### 6. 決定通知

参加者の応募理由を考慮の上、特定の大学・専攻および国籍などに片寄らないように選考し、3月1日（土）より決定通知を郵送する。春期休暇中なので連絡先（帰省地など）を明記すること。

### 7. 申込書送付先

東京都八王子市下柚木1987（〒192-03）

大学セミナー・ハウス企画室 電話 0426-76-8511

## □ このチラシを手にした方へお願い

先生には— 教室や研究室で学生にご紹介下さい。学生には— 大学の友人達にもお勧め下さい。とくに、このセミナーの主題に関心をもつ留学生をお誘い下さい。

